

第33回日本腰痛学会

The 33rd Annual Meeting of the Japanese Society for the Study of Low Back Pain

2025年10月10日(金)、11日(土)

モーニングセミナー 1

腰痛診療における アセトアミノフェンの位置づけと適正使用指針 —高齢者・併存疾患例に対する最適な疼痛管理とは—

日 時

10月11日(土) 8:00～9:00

会 場

第2会場 富山国際会議場
2階「203・204」

座 長

細金 直文 先生

杏林大学医学部整形外科学講座 教授・診療部長

演 者

二階堂 琢也 先生

福島県立医科大学医学部整形外科学講座 准教授

日本整形外科学会教育研修単位1単位が取得できます。
(受講料1講演1,000円)

[7] 脊椎・脊髄疾患、脊椎脊髄病単位 (ss)

※本セミナーは整理券制ではありません。

※日整会の単位を購入された参加者から優先入場いただきます。

共催：第33回日本腰痛学会

あゆみ製薬株式会社



Abstract

腰痛診療における アセトアミノフェンの位置づけと適正使用指針 —高齢者・併存疾患例に対する最適な疼痛管理とは—

福島県立医科大学医学部整形外科学講座 准教授

二階堂 琢也 先生

腰痛は日本人が日常的に経験する最も頻度の高い運動器疾患の一つであり、薬物療法はその管理において中心的な役割を担っている。特に、高齢化が進む現代社会においては、鎮痛効果(益)だけでなく、併存疾患や多剤併用などを背景とする有害事象のリスク(害)を考慮した鎮痛薬の選択が重要である。厚生労働省の「高齢者の医薬品適正使用の指針」では、高齢者の鎮痛薬選択において、消化管出血・腎機能障害・心血管障害などのリスクを考慮することが推奨されており、アセトアミノフェンはNSAIDsに比べてこれらの有害事象のリスクが低いことから、腰痛治療において有力な選択肢となる。特に高齢者では、個々の鎮痛効果と副作用のリスクが大きく異なるため、それぞれの「益」と「害」を的確に判断し、最適な薬剤を選択する必要がある。

国際的な腰痛診療ガイドラインでは、薬剤の有効性だけでなく、副作用、費用対効果、患者の希望などを含めた総合的な推奨が示されている。本邦の「腰痛診療ガイドライン2019」においても、患者のリスクを踏まえた薬剤の適正使用の重要性が明記されており、アセトアミノフェンは急性腰痛・慢性腰痛いずれに対しても「2D(弱い推奨)」とされ、安全性の高さが評価されている。急性腰痛患者を対象としたアセトアミノフェンとロキソプロフェンのランダム化比較試験では、非劣性も報告されている。

2023年にはアセトアミノフェンの適応が「各種疾患及び症状における鎮痛」に拡大し、消化性潰瘍や重篤な腎機能障害が禁忌から除外され、使用可能となったことで、臨床現場での有用性が一層高まっている。投与量についても、1日最大4000mgまでの增量が可能であり、低用量で効果不十分な場合は無効と判断する前に、十分な增量を検討すべきである。

本セミナーでは、腰痛治療における現在のアセトアミノフェンの位置づけに焦点を当て、患者個々の背景に応じた最適な鎮痛薬選択について解説する。